



第1章 東よか干潟とは

1. 東よか干潟のラムサール条約湿地登録概要	2
2. 東よか干潟の国際的な価値と特長	4
3. 東よか干潟の歴史・文化と人との関わり	15

1. 東よか干潟のラムサール条約湿地登録概要

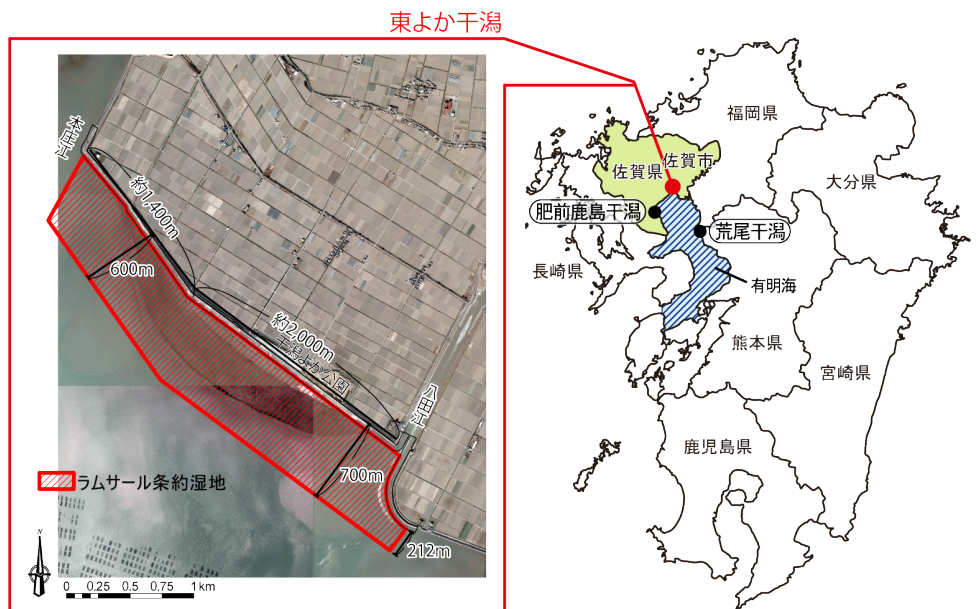
「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」（以降「ラムサール条約」）は、国際的に重要な湿地とそこに生息する水鳥をはじめとした生態系の保全と人類による持続的な利用（ワイズユース）を目的とした条約です。

ラムサール条約の締約国は、条約に定められた国際的な基準などの要件を満たす湿地を「国際的に重要な湿地」に指定し、スイスにある条約事務局が管理する「国際的に重要な湿地に係る登録簿」に掲載します。掲載された湿地をラムサール条約湿地といいます。

2015（平成 27）年5月 28 日（スイス時間。日本時間では 5 月 29 日）に東よか干潟がラムサール条約湿地として登録簿に掲載されるとともに、ウルグアイ東方共和国で開催されたラムサール条約第 12 回締約国会議（COP12）において、条約登録認定証が授与されました。

東よか干潟は、佐賀市南部の有明海の北岸、湾奥部に位置し、単一の干潟としては国内有数規模の泥質の干潟です。条約登録区域は、東与賀海岸の堤防から沖合方向の50m部分を除いた 218ha（国指定東よか干潟鳥獣保護区東よか干潟特別保護地区）の区域です。

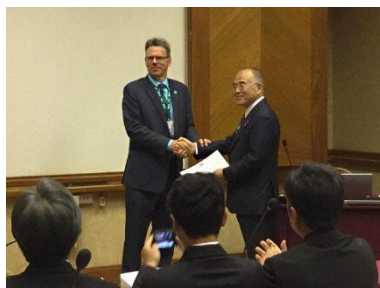
東よか干潟は、渡り鳥であるシギ・チドリ類の渡来数が日本一であり、周辺部には塩生植物シチメンソウの国内最大の群生地を有するなど、周辺域を含めて数々の日本一を有する干潟です。



東よか干潟の概要



条約登録記者会見の様子(佐賀市役所)



認定証授与式(ウルグアイ・インタテル・インステ)
ラムサール条約湿地登録認定



ラムサール条約登録認定証



ラムサール条約が目指すもの

目的

ラムサール条約の正式名称は「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」といい、1971(昭和46)年にイランのラムサールという都市で開催された国際会議で条約が採択されたことから一般に「ラムサール条約」と呼ばれています。湿地は様々な生物の生息地として重要なばかりでなく、私たちの暮らしを支えている重要な資源です。条約では国際協力によって、湿地の保全と湿地の生態系が果たす役割を損なうことなく、持続的に湿地の恩恵を得ること(ワイズユース)を目的としています。

ラムサール条約湿地とは

ラムサール条約の締約国は、条約に定める国際的な基準などの要件を満たす湿地を「国際的に重要な湿地」に指定し、スイスにある条約事務局が管理する「国際的に重要な湿地に係る登録簿」に掲載します。掲載された湿地を「ラムサール条約湿地」といい、地域の特性に応じた保全、ワイズユースの取組が期待されています。

国際的に重要な湿地を指定するための基準

“国際的に重要な湿地を指定するための基準”には9つの項目が設定されています。日本ではこのうちのいずれかに該当する(国際的に重要な湿地であること)ほか、国の法律(自然公園法、鳥獣保護法など)により将来にわたって自然環境の保全が図られる担保があり、地元自治体などの登録への賛意が得られている湿地を登録しています。東よか干潟は基準2、4、6に該当しています。

「国際的に重要な湿地を指定するための基準」

基準1: 特定の生物地理区内で代表的、希少、または固有の湿地タイプを含む湿地

基準2: 絶滅のおそれのある種や群集を支えている湿地

基準3: 特定の生物地理区における生物多様性の維持に重要な動植物を支えている湿地

基準4: 動植物のライフサイクルの重要な段階を支えている湿地。または悪条件の期間中に動植物の避難場所となる湿地

基準5: 定期的に2万羽以上の水鳥を支えている湿地

基準6: 水鳥の1種または1亜種の個体群の個体数の1%以上を定期的に支えている湿地

基準7: 固有な魚類の亜種、種、科、魚類の生活史の諸段階、種間相互作用、湿地の価値を代表するような個体群の相当な割合を支えており、それによって世界の生物多様性に貢献している湿地

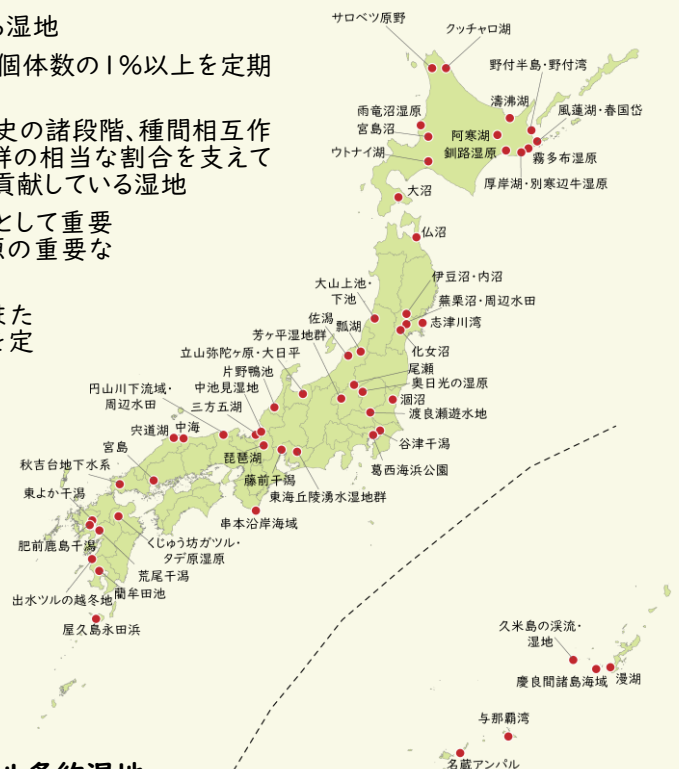
基準8: 魚類の食物源、産卵場、稚魚の生息場として重要な湿地。あるいは湿地内外の漁業資源の重要な回遊経路となっている湿地

基準9: 鳥類以外の湿地に依存する動物の種または亜種の個体群の個体数の1%以上を定期的に支えている湿地

注) 魚類: 魚、エビ・カニ・貝類

日本のラムサール条約湿地

世界のラムサール条約湿地数は2024(令和6)年7月現在2,518カ所です。日本では1980(昭和55)年に釧路湿原を最初の登録湿地としたことを皮切りに、現在53カ所が登録されています。日本は重要な渡り鳥の渡りのルートとなっています。



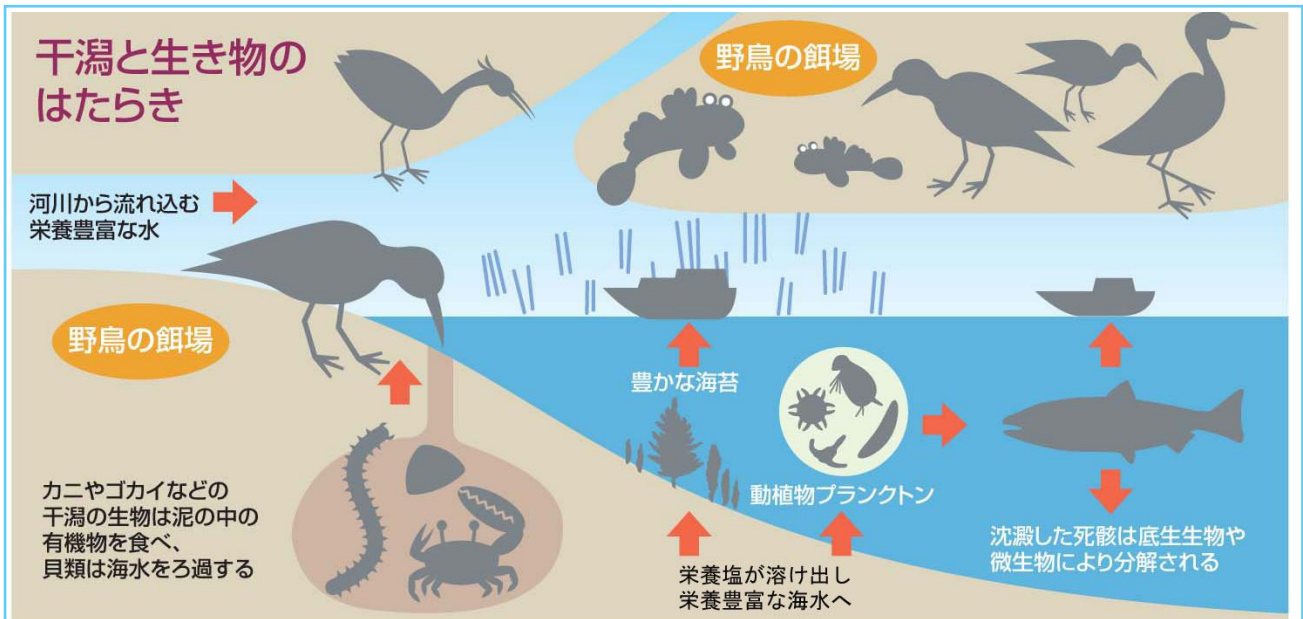
日本のラムサール条約湿地

[参考: 日本のラムサール条約湿地の位置図、環境省、2021(令和3)年]

2. 東よか干潟の国際的な価値と特長

●生物生産性の高い豊かな東よか干潟は、国内有数の水鳥の渡りの中継地・越冬地です。

東よか干潟は、日本の干潟の約4割を有する有明海の干潟の一部で、湾奥部に位置する泥質の干潟です。高いプランクトン生産力を背景に、様々な生物が生息しており、これをねらって種数・渡来数ともに多くの鳥類が訪れます。特にシギ・チドリ類の渡来数は、日本一を誇ります。



- ①陸上起源の豊富な栄養分（窒素、リンなど）や粘土粒子が、河川を通じて海へ流れ込む。
- ②粘土粒子がくっつき合い、これに水中の栄養塩や有機物が付着して、有明海の濁りの元となる浮泥を形成（栄養分の貯蔵庫として安定的に生物生産を支える）。
- ③豊富な栄養分を、干潟表面の珪藻類・植物プランクトンが取り込み、これを魚類や貝類が食べ、さらに人間や鳥類が食べることで干潟外に栄養分が持ち出される。
- ④海域に放出された生物の死骸、糞などの有機物は、カニやゴカイなどが食べる。

干潟の生態系とその役割

[参考：東よか干潟ガイドブック、環境省、2016（平成28）年]

●ラムサール条約 国際的に重要な湿地を指定するための基準2：

東よか干潟には、国際的に絶滅のおそれのある鳥類が渡来します。

東よか干潟では10目19科103種の鳥類が確認されています。

中でもシギ・チドリ類は種数・渡来数ともに多く、旅鳥として、春・秋の渡りの時期に渡来します。

また、これらの種の中には、クロツラヘラサギ、ズグロカモメ、ホウロクシギなど国際的に絶滅のおそれのある種も多くみられます。



東よか干潟の鳥類(1/3)

No.	目	科	種または亜種	種の指定など	確認頻度	
1	カモ	カモ	<u>ヒシクイ</u>	VU		
2			マガン	NT、天然記念物		
3			<u>ツクシガモ</u>	VU	○	
4			アカツクシガモ	DD		
5			オカヨシガモ	—	○	
6			ヨシガモ	—	○	
7			ヒドリガモ	—	○	
8			マガモ	—	○	
9			カルガモ	—	○	
10			ハシビロガモ	—	○	
11			オナガガモ	—	○	
12			シマアジ	—		
13			<u>トモエガモ</u>	VU		
14			コガモ	—	○	
15			ホシハジロ	—	○	
16			キンクロハジロ	—	○	
17			スズガモ	—	○	
18			ホオジロガモ	—	○	
19			ウミアイサ	—	○	
20	カイツブリ	カイツブリ	ハジロカイツブリ	—	○	
21	ミズナギドリ	ミズナギドリ	ハシボソミズナギドリ	—		
22	カツオドリ	ウ	カワウ	—	○	
23	コウノトリ	サギ	ゴイサギ	—		
24			アマサギ	—		
25			アオサギ	—	○	
26			ダイサギ	—	○	
27			チュウサギ	NT		
28			コサギ	—	○	
29			カラシラサギ	NT		
30			トキ	ヘラサギ	DD	
31				<u>クロツラヘラサギ</u>	EN	○
32			チドリ	チドリ	タゲリ	—
33	ケリ	DD				
34	ムナグロ	—				
35	ダイゼン	—			○	
36	ハジロコチドリ	—				
37	コチドリ	—			○	
38	<u>シロチドリ</u>	VU			○	
39	メダイチドリ	国際希少			○	
40	オオメダイチドリ	国際希少				
41	ミヤコドリ	ミヤコドリ			—	
42	セイタカシギ	<u>セイタカシギ</u>			VU	○
43		ソリハシセイタカシギ			—	
44	シギ	タシギ			—	○
45		オオハシシギ			—	○
46		シベリアオオハシシギ	DD			

東よか干潟の鳥類(2/3)

No.	目	科	種または亜種	種の指定など	確認頻度
47	チドリ	シギ	オグロシギ	—	○
48			アメリカオグロシギ	—	
49			オオソリハシシギ	VU	○
50			コシャクシギ	国際希少、EN	
51			チュウシャクシギ	—	○
52			ダイシャクシギ	—	○
53			ホウロクシギ	国際希少、VU	○
54			ツルシギ	VU	
55			アカアシシギ	VU	○
56			コアオアシシギ	—	
57			アオアシシギ	—	○
58			カラフトアオアシシギ	国内希少、CR	
59			クサシギ	—	
60			タカブシギ	VU	
61			キアシシギ	—	○
62			ソリハシシギ	—	○
63			イソシギ	—	○
64			キョウジョシギ	—	○
65			オバシギ	国際希少	○
66			コオバシギ	国際希少	
67			ミュビシギ	—	
68			ヒメハマシギ	—	
69			トウネン	—	○
70			ヨーロッパトウネン	—	
71			オジロトウネン	—	
72			ヒバリシギ	—	
73			アメリカウズラシギ	—	
74			ウズラシギ	—	○
75			サルハマシギ	国際希少	
76			ハマシギ	NT	○
77			ヘラシギ	CR	
78			キリアイ	—	
79	エリマキシギ	—			
80	ヒレアシシギ	アカエリヒレアシシギ	—		
81	ツバメチドリ	ツバメチドリ	VU		
82	カモメ	ユリカモメ	—	○	
83		ズグロカモメ	VU	○	
84		ウミネコ	—	○	
85		カモメ	—		
86		セグロカモメ	—	○	
87		オオセグロカモメ	NT		
88		ハシブトアジサシ	—		
89		オニアジサシ	—		
90		コアジサシ	VU	○	
91		アジサシ	—		
92	クロハラアジサシ	—			



東よか干潟の鳥類(3/3)

No.	目	科	種または亜種	種の指定など	確認頻度
93	チドリ	カモメ	ハジロクロハラアジサシ	—	
94	タカ	ミサゴ	ミサゴ	NT	○
95		タカ	トビ	—	○
96			チュウヒ	EN	
97			ハイイロチュウヒ	—	
98	フクロウ	フクロウ	コミズク	—	
99	ハヤブサ	ハヤブサ	コチョウゲンボウ	—	
100			ハヤブサ	国内希少、VU	○
101	スズメ	カラス	ミヤマガラス	—	○
102		ツバメ	ショウドウツバメ	—	○
103			ツバメ	—	○

注) 1. データはモニタリングサイト1000調査及び日本野鳥の会の行った補足調査結果を拠ります。

2. 鳥類の目・科・種(和名)及び配列は、日本鳥類目録改訂第7版(日本鳥学会、2012(平成24)年)に拠ります。

3. 種の指定などの要件は次のとおりです。

環境省レッドリスト2020

CR:絶滅危惧ⅠA類、EN:絶滅危惧ⅠB類、VU:絶滅危惧Ⅱ類、NT:準絶滅危惧、DD:情報不足

国内希少:絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律による国内希少野生動植物種

国際希少:絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律による国際希少野生動植物種

天然記念物:文化財保護法による天然記念物

4. 項目「確認頻度」の○印は当該区域において一般的に見られる鳥類です。アンダーラインは、鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律第2条第4項において特に保護を図る必要があるものとして環境省令で定める鳥獣及び天然記念物に指定された鳥獣です。

“大授搦”と“東よか干潟”

有明海沿岸には、搦(からみ)という字が付いた地名がたくさんあります。搦とは、「縄が木にカラみつく」という意味です。これは昔の干拓工事の名残りで、堤防にする場所に丸太杭を打ち込み、その杭に木の枝や竹などを絡み付け、満潮の時に潮といっしょに運ばれてくる土砂を、その場所に堆積させました。その自然の力によって、杭周辺の地盤が満潮位近くまで高くなったところを付き固めて、それから上へは人力で堤防を高くしました。このようなことから、多くの干拓地を”○○からみ”と命名するようになりました。

東よか干潟は東与賀町の最南端である大授地域に位置するため大授搦(だいじゅがらみ)と呼ばれてきましたが、国際的に重要な湿地として2015(平成27)年5月にラムサール条約湿地に登録される際、より親しみやすい名称が検討され、地名「東与賀」と佐賀弁の「よか(良い)干潟」の意味をかけた“東よか干潟”と命名されました。

ツクシガモ(絶滅危惧Ⅱ類)



クロツラヘラサギ(絶滅危惧ⅠB類)



セイタカシギ(絶滅危惧Ⅱ類)



ズグロカモメ(絶滅危惧Ⅱ類)



国際的に絶滅のおそれのある鳥類(環境省レッドリスト)



東よか干潟の野鳥



●ラムサール条約 国際的に重要な湿地を指定するための基準4:

東よか干潟は、東アジア地域におけるシギ・チドリ類の重要な渡りの中継地・越冬地です。

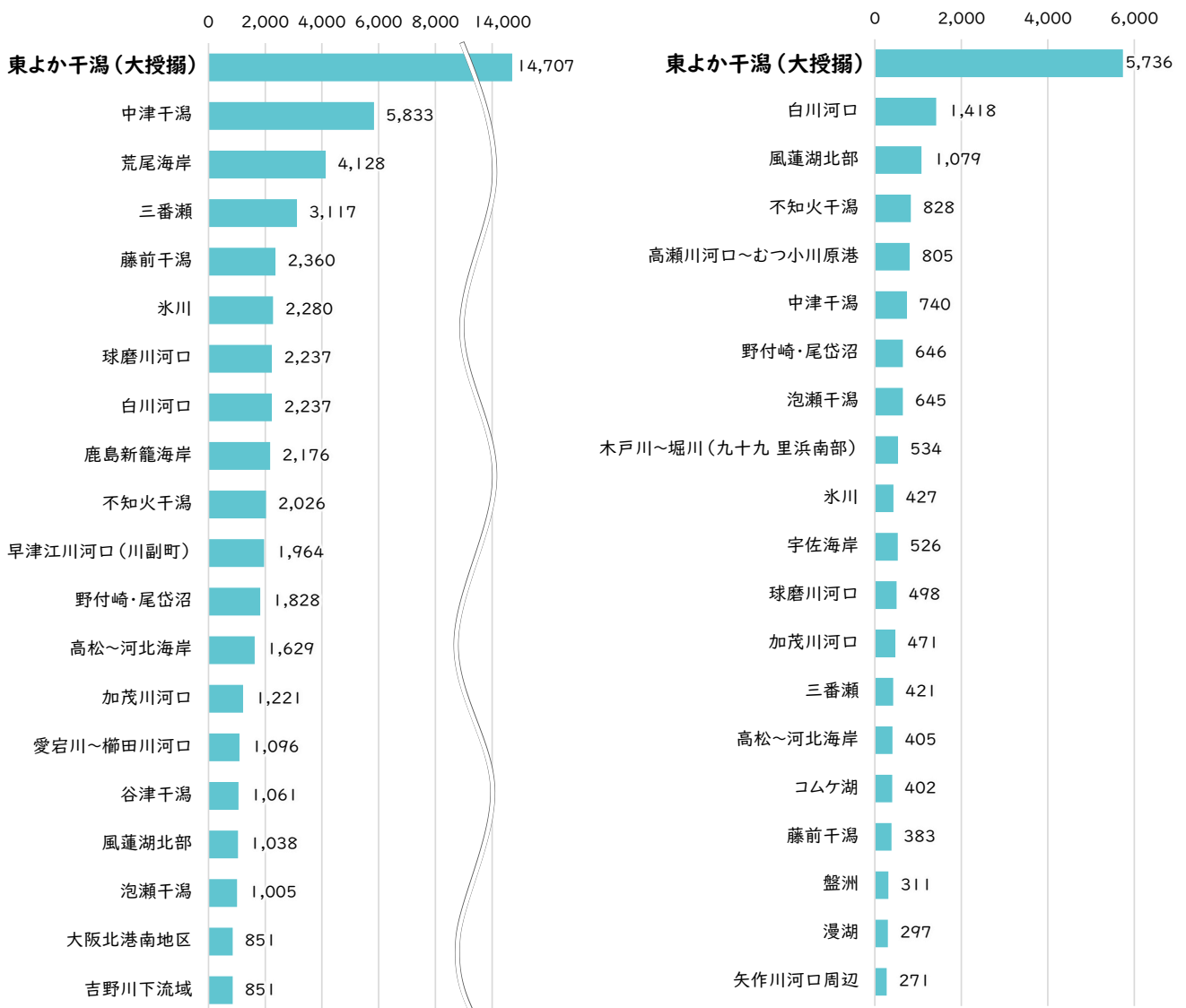
東よか干潟は絶滅危惧種を含む水鳥たちの国内有数の渡りの中継地・越冬地です。

特にシギ・チドリ類の渡来数は日本一を誇り、夏季にはシベリアやアラスカで繁殖し、冬季は越冬のためにオーストラリアやニュージーランドへ南下します。春・秋の渡りの季節になると、数千羽のシギやチドリが餌をついばむ姿を見ることができます。多くの渡り鳥にとって渡りの中継地は重要で、特に定常的に渡来数の多い東よか干潟がなくては、ライフサイクル自体が崩れてしまう可能性があります。

これだけの野鳥が東よか干潟に集まるのは、河川から豊かな栄養物質が流れ込む位置にあることで、野鳥の餌となるカニやゴカイなどの生物が豊富に生息しているためです。

【春季】

【秋季】



地域別シギ・チドリ類の飛来数

[出典: 2023年度 モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査 2022年度 総括報告書、環境省、2024(令和6)年]

●ラムサール条約 国際的に重要な湿地を指定するための基準6:

東よか干潟は、複数種の水鳥の個体群の個体数の1%以上を定期的に支えている湿地です。

東よか干潟には毎年、シギ・チドリ類をはじめとする多くの渡り鳥が渡来します。これらの渡り鳥は季節に応じて繁殖地と越冬地を地球規模の大移動を繰り返しながら生活しています。渡りのルートは種や個体群ごとに大まかに決まっており、繁殖地、渡りの中継地・越冬地のどれが欠けても種としての存続が難しくなります。特に特定の種や個体群の利用率の高い環境は、その種にとって重要です。東よか干潟は、複数種の水鳥の個体群の1%以上の個体数を定期的に支える湿地となっています。

なお、ラムサール条約湿地登録申請時、基準6に該当する水鳥の個体群はクロツラヘラサギ、ズグロカモメ、ダイゼンの3種でしたが、近年、チュウシャクシギ、ツクシガモの個体群についても1%を超える個体数が観察されるようになってきました。

クロツラヘラサギ



東アジア個体群		東よか干潟	
推計個体数	5,222 羽	渡来数	39~65 羽
1%基準値	50 羽	渡来数割合 (渡来数/ 推計個体数)	0.7~1.2%

ズグロカモメ



東アジア個体群		東よか干潟	
推計個体数	34,000 羽	渡来数	1,340~ 2,760 羽
1%基準値	340 羽	渡来数割合 (渡来数/ 推計個体数)	3.9~8.1%

ダイゼン




東アジアの地域個体群		東よか干潟	
推計個体数	80,000~ 104,000 羽	渡来数	1,260~ 1,550 羽
1%基準値	1,000 羽	渡来数割合 (渡来数/ 推計個体数)	1.21~ 1.49%


推計個体数の1%以上の渡来が確認される種(1/2)



チュウシャクシギ

	東アジアの地域個体群		東よか干潟	
	推計個体数	65,000 羽	渡来数	494~ 1,210 羽
	1%基準値	650 羽	渡来数割合 (渡来数/ 推計個体数)	0.8~1.9%

ツクシガモ

	東アジアの地域個体群		東よか干潟	
	推計個体数	100,000~ 150,000 羽	渡来数	2,420~ 4,370 羽
	1%基準値	1,200 羽	渡来数割合 (渡来数/ 推計個体数)	1.6~2.9%

推計個体数の1%以上の渡来が確認される種(2/2)

- 注) 1. 推計個体数のデータは、Wetlands International の Waterbird Population Estimates (2024 (令和 6) 年現在) に拠ります。
2. 渡来数のデータは、環境省のモニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 総括報告書 (2017 (平成 19) 年度から 2022 (令和 4) 年度) に拠ります。
3. 登録時の Ramsar Information Sheet では、クロツラヘラサギ、ズグロカモメ、ダイゼン、チュウシャクシギ、ツクシガモの 5 種を記載。クロツラヘラサギ及びズグロカモメは東アジア地域にしか生息していないため“東アジア個体群”と示しています。ダイゼン、チュウシャクシギ、ツクシガモは東アジア以外の地域にも生息しており、明確に区分するために“東アジアの地域個体群”と示しています。

●東アジア・オーストラリア地域フライウェイにおける渡り性水鳥の重要な生息地の1つとして認定されています。

日本に渡来する多くの渡り鳥は、東アジア・オーストラリア地域フライウェイを利用しています。その地域は、北はアラスカからロシア東部、シベリアにかけての地域から、日本や朝鮮半島と中国東部を通り、東南アジア、ニューギニア、オーストラリアからニュージーランドへかけての地域で、渡り鳥の保全上特に重要なフライウェイと認識されています。

東アジア・オーストラリア地域フライウェイ下の地域では「東アジア・オーストラリア地域フライウェイパートナーシップ (EAAFP)」が 2006 (平成 18) 年に発足し、渡り鳥の生息状況や保護活動について情報や技術の交換を行っています。また EAAFP では渡り性水鳥の重要な生息地による国際ネットワークを形成しています。このネットワークには 22 の国 152 サイト (2023 (令和 5) 年現在) が参加しており、東よか干潟も国内 33 番目のサイトとして 2016 (平成 28) 年 5 月 5 日に参加が認定されました。



参加認定証授与式



参加認定証

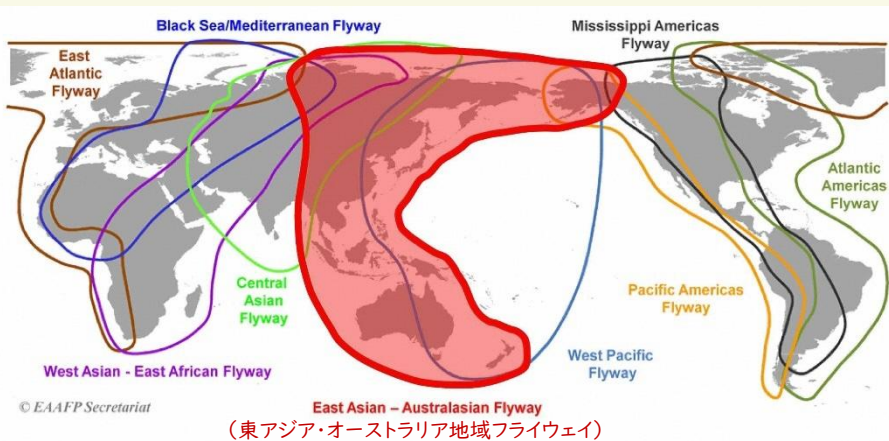


東アジア・オーストラリア地域フライウェイロゴマーク

東アジア・オーストラリア地域渡り性水鳥重要生息地ネットワークへの参加

渡り鳥の主要な渡り経路 (フライウェイ)

渡り鳥は繁殖地と越冬地を季節に応じて移動しながら生活しています。それぞれの種が存続するには繁殖地、渡りの中継地・越冬地の全てが確保される必要があります。特に埋め立てなどの開発圧力が高く、人の活動により環境変化を引き起こしやすい湿地を主な生息環境とする水鳥は、多くの種で絶滅が危惧されており、渡りのルート上にある各国が協力して種や生息地の保全に取り組む必要があります。渡りのルートは“フライウェイ”と呼ばれ、世界的には9つの範囲に分けられています。



東アジア・オーストラリア地域フライウェイ

(北極圏～ニュージーランドの 22 の国にまたがる)

[参考: The Flyway, EAAFP 事務局、2024 (令和 6) 年現在]



●「東よか干潟」と「クパルック湿地 (Qupaluk)」の姉妹湿地提携を通じて、東アジア・オーストラリア地域フライウェイにおける湿地保全の協力推進が求められています。

佐賀市は2023(令和5)年2月8日にアメリカ合衆国内務省土地管理局と、東よか干潟及びクパルック湿地(Qupaluk)の姉妹湿地提携に関する覚書を締結しました。

東よか干潟とクパルック湿地は、ともに東アジア・オーストラリア地域フライウェイパートナーシップ(EAAF P)に参加し、渡り鳥の生息のための保全などに取り組んでいる湿地です。東よか干潟がシギ・チドリ類の渡りの中継地・越冬地として重要な場所となっているのに対して、クパルック湿地はアメリカ合衆国アラスカ州にあり、シギ・チドリ類の重要な繁殖地として知られています。

どちらの湿地もシギ・チドリ類にとって重要な場所であることから、姉妹湿地として提携し、共通調査や知見の共有などを行いながら湿地保全の取組を進めていくことが望まれています。

姉妹湿地プログラム

姉妹湿地プログラムは、東アジア・オーストラリア地域フライウェイパートナーシップ(EAAF P)が推進する枠組です。繁殖地と越冬地など、湿地に飛来する同じ種を共有する2つ以上の重要生息地ネットワークサイトを結びつける公的な合意で、主な協力の例として以下の5つが挙げられています。

- ①共同モニタリング ②共同調査・研究 ③湿地管理者の能力向上
- ④CEPA(対話、教育、参加、普及啓発) ⑤地域社会と国際的な連携の促進

[資料:「姉妹湿地プログラム及びそれ以外のネットワーク参加地間に関するガイドライン」2022(令和4)年、EAAF P事務局]

クパルック湿地 (Qupaluk)

クパルック湿地は、アメリカ合衆国アラスカ州の北極沿岸平原にあるアラスカ国立石油保護区内のテシュクプク湖北東に位置しており、アラスカ州土地管理局によって管理されています。広さは約21,000haで、ほぼ手つかずのツンドラ湿地帯です。

クパルック湿地には、約6,000羽のハマシギが生息しているほか、合計約30,000羽の渡り鳥が営巣しており、様々な種の渡り鳥が繁殖するための重要な生息地となっています。



クパルック湿地の様子及び位置



アジア湿地シンポジウム 2017 の佐賀市開催と「佐賀ステートメント」

アジア湿地シンポジウムとは？

行政、NGO、NPO、専門家、民間企業、地域住民等の多様な主体が、アジアの湿地の保全、持続可能な管理、賢明な利用に関するお互いの知識、知恵、実践的な経験を共有し、学ぶ機会を提携する場（フォーラム）です。ラムサール条約の決議でも開催が支持されている地域的な国際湿地シンポジウムです。

アジア湿地シンポジウム 2017 (佐賀市)

2017(平成 29)年 11 月 7 日から 11 日までの 5 日間、第 8 回アジア湿地シンポジウムが、佐賀市で開催されました。27 の国と地域から約 870 人が参加したこのシンポジウムでは、ラムサール条約湿地登録間もない東よか干潟の国際的な価値や重要性が再確認される機会となりました。また、本会議における「佐賀ステートメント」（資料編 86 頁参照）の採択により、各種取組を進めていくことが宣言されています。



市長円卓会議



フィールドビジット

アジア湿地シンポジウム 2017



3. 東よか干潟の歴史・文化と人との関わり

● “干拓”を通じて、人の英知と自然の働きかけにより成立した唯一無二の環境です。

東よか干潟の位置する佐賀平野南部は、有明海沿岸において土砂の堆積による干潟の形成と干陸化の著しい地域です。現在の広大な筑紫平野は、7000年前の縄文海進以降に形成されたもので、粒子の細かい粘土質の土砂の堆積は、全国でも珍しい縄文時代早期の湿地性貝塚「東名遺跡」の発見を可能にしました。遺跡からは、アゲマキやカキなど現在の有明海に見られる生物が見つかっており、当時から人々が干潟の恵みを享受しつつ、環境に寄り添って生活していたことがうかがわれます。

稲作が始まってからは、もっぱら干陸化と人為的な干拓による農地利用が行われてきました。干陸・干拓の歴史は古く、鎌倉時代にまで遡ります。干ばつ、洪水、高潮など、そのままでは災害をもたらす低平地を、築堤、排水、治水、灌漑などの、先人の自然に対するたゆまぬ働きかけにより、豊かな土質に恵まれた国内でも有数の穀倉地帯に変貌させました。また、これら農地への給水・排水を確保するために形成されたクリーク(水路)は独特の景観を形成し、干潟とともに一大湿地の様相を呈しています。



有明海湾奥部の海岸線の移り変わり



東よか干潟と後背地(クリーク地帯)

[写真:国土地理院空中写真, 2014(平成26)年]

※後背の干拓地では稲や麦の栽培が行われ広大な湿地様の環境が出現する。



水田で採餌するサギ類

※田植え後の後背地の圃場。湿地を好む生物の生息環境となる。



おおがらみ じゅさんしゃがらみ
大瀬・授産社瀬の堤防

※干拓のまち東与賀を象徴する景観として親しまれる。
(第12回佐賀市景観賞)



ひがしみょう
縄文時代早期の湿地性貝塚「国史跡：東名遺跡」

筑紫平野の発達史の鍵を握る遺跡

「東名遺跡」は佐賀市金立町千布にある縄文時代早期の貝塚で、当時の生活様式や文化を知るための数少ない遺跡として大変重要です。

遺跡に残されているのは今からおよそ 7000 年前のもので、当時の海岸線は現在より 10km ほど内陸にありました。東名遺跡は大きな川の河口付近に立地していたと考えられ、干満の影響が強い干潟のような環境であったことが想定されます。

また、水辺で多くの遺物が水に浸かった保存のよい状態となり、貝や動物の骨などが残りやすい湿地性貝塚となる条件に加え、粘土層で急激に覆われるといった本地域ならではの要素が付加されたことで、普通の遺跡では残らない動植物性遺物が良好に残っています。

約 7000 年前の有明海沿岸の人々の暮らし

東名縄文人は、陸上の植物を主要な食料源とし、併せて魚介類をタンパク質源とするような食生活を営んでいたようです。貝塚から確認される貝殻のほとんどは、ヤマトシジミ、ハイガイ、アゲマキ、カキで、これらを好んで食べていたことが分かります。魚類ではスズキ、ボラ、クロダイが多く確認されています。また、水が湧くような低い場所には貯蔵穴を設け、ドングリなどの堅果類の短期貯蔵に使っていました。

稲作が始まるずっと昔から、有明海の湿地環境は人々の生活を支える重要な環境であったことが分かります。

東名縄文人の暮らし

[出典：東名縄文人の暮らしの様子、早川和子]

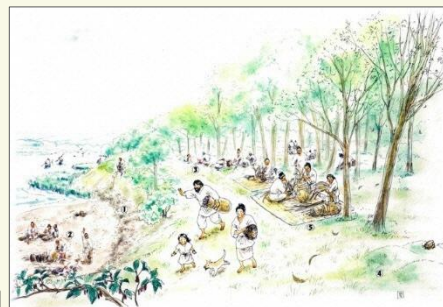


縄文海進ピーク時期の筑紫平野

[出典：東名遺跡のすべて、佐賀市教育委員会、2013(平成 25)年]



貝塚





●まえうみは泥干潟ならではの昔ながらの漁法が営まれているほか、日本を代表する海苔の生産地として知られる豊穡の海です。

約 6m の日本一の干満差と、土砂や泥の堆積しやすい水深の浅い遠浅の海の広がる有明海湾奥部では、干潮時に濡れた鉛色の潟土の原が遠く地平の彼方にまで広がる雄大な風景が現れます。この潟土はミクロン級(1m の 100 万分の1の大きさ)の粘土で、今から約9万年前、九州中央に位置する阿蘇山が大噴火した火砕流堆積に由来します。この有明海を形成する潟土こそが「有明粘土層」と呼ばれ、有明海の濁った海水のもとであり、また、干潟をはじめ、多くの生命を育む命の“ゆりかご”となっています。

有明海の広大な干潟は、沖合に対して前の海「まえうみ」、そこに生息する魚介類は「まえうみもん」と呼ばれ、近隣に住む人々は干拓地での農業のかたわら、「まえうみもん」を漁獲の対象とし、生活の糧としてきました。干潮時の「まえうみ」は土質も形状も後背地の農地に近いことから、漁獲の道具も農具から転用したもの、漁具と農具の形がほとんど同じものがみられます。これら干潟の生物を捕らえるための独自の漁法が営まれてきたほか、ムツゴロウの蒲焼きなど干潟の生物を使った郷土料理は、雄大な干潟の景観とともに地元で生活する私たちの心の原風景となっています。

また有明海では栄養分豊富な海水と日本一の潮汐の干満差を活かし、海苔の養殖場としても利用されてきました。東よか干潟のすぐ南の沖にも海苔の養殖漁場が広がっています。佐賀海苔は、販売量、販売金額、ともに日本トップクラスとなっています。



東よか干潟の沖に広がる海苔の養殖漁場

[写真:環境省]



東よか干潟の沖に広がる海苔ひび

有明海で見られる主な伝統漁法

有明海の伝統漁法の概要		
<p>干満差が大きく広い潟土の原が現れる干潟では、環境の特性を活かした独特の漁法がみだされてきました。これらの漁法は有明海とともに生きてきた先人たちの知恵の結晶であり、未来へ伝えていくべき文化的遺産です。しかし、現在では食文化の変化、あるいは漁獲対象の生息数の減少などから、昔ながらの漁の風景を見ることは少なくなりました。</p>		
漁法		解説
ガタスキー 		東よか干潟の泥は粒子が細かく、柔らかい粘土状であるため、立つと足が沈んでしまいます。そのため“ガタスキー”と呼ばれる押し板が必要不可欠になります。
スポかき 		ワラスポは泥の中の生活に適応し、その目は退化して、ほとんど確認できません。その見た目からは意外なほど濃厚な味わいで、干物や煮付けにして食べられます。普段は潟の泥中に生息しているため、先にカギ状の金具が付いたかき棒を使って、干潟の泥を引っ掻くようにして引き上げます。
ムツかけ漁 		ムツゴロウは、日本では有明海と八代海にのみ生息するハゼ科の魚で、干潮時には干潟の上をびよんびよんと跳ね回る愛らしい姿がみられます。ムツかけ漁は、釣竿の先に付いたカギ状の金具を投げ込み、ひっかけて採る手法。その鮮やかな技はまさに職人芸と言えます。
タカツポ漁 		一度通ると戻れない特殊な構造の筒を、ムツゴロウの巣穴に仕掛け、入るのを待ちます。ムツかけと違い、ムツゴロウを傷つけずに捕獲できます。
カニとり 		片方のハサミだけが大きいカニ“シオマネキ”。生息孔に手を差し入れて取り上げたり、農具の鍬(くわ)に似た板鍬で掘って、手づかみで捕まえたりします。
メカジャとり 		メカジャは正式にはミドリシャミセンガイと言い、数億年前からその姿が変わらないことから、生きた化石とも呼ばれます。 干潟の泥の比較的浅い所に生息しているため、農具の鍬(くわ)に似た板鍬で地上付近を掘り返し、捕獲します。
シャツパふみ 		シャツパとはシャコのごとく、寿司ネタとしても多く使われます。干潟に浅くて長いU字型の孔を掘って生息しており、その二つの孔のいずれかを足で踏み付けると、もう一方の孔から海水と一緒に飛び出るので、そこを捕まえます。
ウミタケねじ 		ウミタケは二枚貝で、殻を泥の中に埋め、長い水管を泥の外に出して生息しています。捕獲のためのねじ棒の先にはT型になるように鉄棒が取り付けられてあり、これを泥中に差し込み、回して、ウミタケの水管が絡み付いたところを引き上げます。
たけはぜ 竹羽瀬漁 		竹羽瀬漁では海に数百本の竹をVの字になるように立て込み、潮流に乗って移動してくる魚介類を網の中に誘導し、捕獲する漁法です。干満の差や潮流の速さを活かした、有明海ならではの漁法です。

[参考:東よか干潟ガイドブック、環境省、2016(平成28)年]



●地質時代の日本の過去を語る多くの生物が生息しています。

東よか干潟は湾口から約 100km の内湾域にあります。そのため、日本列島がユーラシア大陸から分離して島となった中新世（約2千万年前）以降、外海から隔離された状態が続いており、かつてユーラシア大陸と陸続きであったことを示す大陸依存種や、日本ではここでしか見られない有明海固有種が多く生息しています。

2016（平成 28）年度から 2023（令和5）年度に佐賀市が実施した、環境省レッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類に指定されている塩生植物シチメンソウの保全地区である“シチメンソウヤード”を含む東よか干潟底生生物の現地調査では、環境省、佐賀県、ベントス学会のレッドデータブックに記載されている絶滅危惧種が 52 種確認されました。これらの種は有明海の他の干潟では減少しほとんど確認できないものが多く、有明海を特徴付ける軟泥質の干潟の中で、東よか干潟は健全な生息環境の残っている重要な場所であると評価されました。また、シチメンソウヤードの植生に依存している絶滅危惧種も多く確認されました。



シチメンソウヤード

一方で、絶滅危惧種の生存を脅かす外来種も現地調査では確認されています。例えば、絶滅危惧種のカワグチツボ、ウマイマイ、近縁のエドガワミズゴマツボと同所的に生息し競合関係にあるトライミズゴマツボが、広い範囲で確認されています。また、有明海の軟泥質に生息するカワグチツボは、アサリの放流時にトライミズゴマツボなどとともに移植された外国産の個体群の可能性が示唆されており、有明海の在来の個体群の生息を脅かしている可能性があります。今後、絶滅危惧種の保全を考えるうえで、外来種への対策も併せて検討していく必要があります。

東よか干潟の絶滅危惧種及び外来種の確認状況（1/2）

No.	種名		調査地点	生息環境	絶滅危惧種カテゴリ ^注			
					環境省	佐賀県	ベントス学会	その他
1	刺胞動物門	鉢クラゲ綱	ビゼンクラゲ	プランクトン		VU		
2		花虫綱	ホウザインソギンチャク属	不明			NT	
3	軟体動物門	腹足綱	ヒロクチカノコガイ	護岸、植生	NT	NT	NT	
4			スクミリンゴガイ	淡水域				外来種
5			クロヘナタリガイ	植生、泥干潟	CR+EN	CR+EN	VU	
6			シマヘナタリガイ	植生、泥干潟	CR+EN	CR+EN	EN	
7			カワグチツボ	泥干潟	NT		NT	外国産
8			ワカウラツボ	砂泥干潟	VU	CR+EN	VU	
9			ヤミカワザンショウガイ	護岸、植生	NT	CR+EN	NT	
10			アズキカワザンショウガイ	護岸、植生	VU	NT	NT	
11			トライミズゴマツボ	泥干潟				外来種
12			サキグロタマツメタガイ	泥干潟	CR+EN	CR+EN	CR	外来種
13			カラムシロガイ	泥干潟				外来種
14			ヤベガワモチ	護岸、植生	CR+EN		CR	
15			センベシアワモチ	護岸、植生	CR+EN	CR+EN	EN	
16			ナラビオカミミガイ	護岸、植生	VU	CR+EN	VU	
17			オカミミガイ	護岸、植生	VU	CR+EN	VU	
18	クリイロコミミガイ	護岸	VU	CR+EN	VU			

東よか干潟の絶滅危惧種及び外来種の確認状況(2/2)

No.	種名		調査地点	生息環境	絶滅危惧種カテゴリー ^{注)}			
					環境省	佐賀県	ベントス学会	その他
19	軟体動物門	腹足綱	キヌカツギハマシイノミガイ	護岸、植生	VU	CR+EN	VU	
20			ウミマイマイ	泥干潟	VU	CR+EN	VU	
21		二枚貝綱	ササゲミエガイ	泥干潟	CR+EN	CR+EN	EN	
22			ハイガイ	泥干潟	VU	CR+EN	EN	
23			アリアケケボリガイ	砂泥浅海域	CR+EN		EN	
24			イチョウシラトリガイ	泥干潟	CR+EN	CR+EN	EN	
25			テリザクラガイ	泥干潟	VU	CR+EN	VU	
26			オチバガイ	砂泥干潟	NT		NT	
27			アゲマキガイ	泥干潟	CR+EN	VU	CR	
28			ウネナシトマヤガイ	カキ礁	NT			
29			ヤマトシジミ	汽水域	NT		NT	
30			ハナグモリガイ	泥干潟	VU	NT	VU	
31			ヒラタヌマコダキガイ	泥干潟				外来種
32			環形動物門	ゴカイ綱	アリアケカワゴカイ	泥干潟	EN	
33	ウチワゴカイ	砂泥干潟			NT		VU	
34	イトメ	植生、泥干潟			NT		NT	
35	アリアケイトゴカイ	泥干潟					DD	
36	節足動物門	顎脚綱	タテジマフジツボ	護岸				外来種
37			アメリカフジツボ	護岸				外来種
38			ヨーロッパフジツボ	護岸				外来種
39		軟甲綱	シバエビ	砂泥浅海域		NT		
40			ハシボソテツボウエビ	泥干潟	NT		VU	
41			マングローブテツボウエビ	泥干潟	NT			
42			メナシピンノ	泥干潟	NT		VU	
43			ムツハアリアケガニ	泥干潟	NT		NT	
44			アリアケガニ	植生、泥干潟	VU	VU	EN	
45			アリアケモドキ	泥干潟			VU	
46			ハラグクレチゴガニ	泥干潟	NT	NT	NT	
47			シオマネキ	植生、泥干潟	VU	VU	VU	
48			ハマガニ	植生、泥干潟	NT		NT	
49			クシテガニ	植生、泥干潟	NT		VU	
50			ベンケイガニ	植生	NT		VU	
51			ヨコナガモドキ	泥干潟	NT		NT	
52	ヒメケフサイソガニ	カキ礁	NT	VU	VU			
53	腕足動物門	腕足綱	ミドリシャミセンガイ	砂泥干潟		NT	NT	
54	脊椎動物門	硬骨魚綱	タビラクチ	泥干潟	VU	VU		
55			ムツゴロウ	泥干潟	EN			
56			トビハゼ	泥干潟	NT	NT		
57			ワラスボ	泥干潟	VU	NT		
58			ハゼクチ	泥干潟	VU	VU		
59			マサゴハゼ	泥干潟	VU	NT		
計	出現種数			-	46	31	42	9
	合計			-	52			-



注) 環境省:「環境レッドリスト 2020」(令和 2 年 3 月)、「海洋生物レッドリスト 2017」(平成 29 年 3 月)
 佐賀県:「佐賀県レッドリスト 2003」(平成 16 年 3 月)、「佐賀県レッドリスト汽水・淡水魚類編 2016」(平成 29 年 3 月)
 ベントス学会:「干潟の絶滅危惧動物図鑑」(平成 24 年 7 月)
 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)、絶滅危惧 I A 類 (CR)、絶滅危惧 I B 類 (EN)、絶滅危惧 II 類 (VU)、準絶滅危惧 (NT)、情報不足 (DD)
 その他:「外来種ハンドブック、日本生態学会編」(平成 14 年 9 月)
 「田牧、真堀、石橋、福田(2002) 有明海湾奥部へ新たに侵入した腹足類の移入種トライミズゴマツボとカラムシロ、
 THE YURIYAGAI 8:63-81」
 同一種の在来個体群に代って外国産の個体群が増殖(外国産)、国外からの移入種(外来種)

ムツゴロウ



ワラスボ



トビハゼ



アズキカワザンショウガイ



キヌカツギハマシイノミガイ



ウミマイマイ



東よか干潟で確認されている生物(1/2)

テリザクラガイ



ヤベガワモチ



ムツハアリアケガニ



クシテガニ



ベンケイガニ



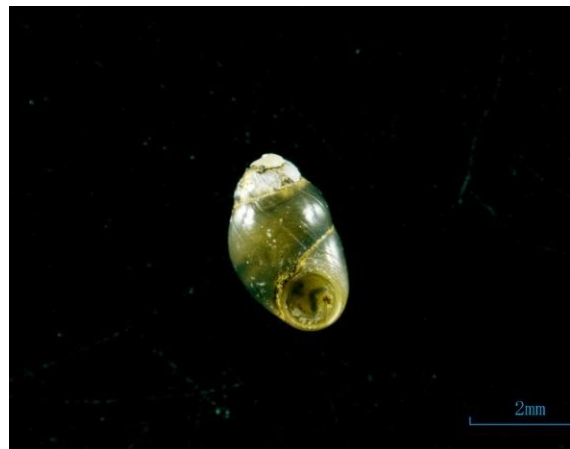
シオマネキ



カワグチソボ(外国産の疑いあり)



トライミズゴマツボ(外来種)



東よか干潟で確認されている生物(2/2)